仙台から振り返る「こども☆ひかりプロジェクト」の10年

東日本大震災の被災地で子どもたちが我慢を強いられていることに心を痛めた全国のミュージアム関係者達が「ミュージアムの力で子どもたちを笑顔に!」を合言葉に立ち上がった「こども☆ひかりプロジェクト」。その歩みは仙台のミュージアム界隈とも関わりの深いものとなりました。10年に渡るプロジェクトの一端ではありますが、仙台から見えたその歩みを振り返ります。

（構成：白川由利枝［こども☆ひかり倶楽部］+SMMA 事務局）

2011年

2011年3月11日、東日本大震災。7月6日・7日には、兵庫県立人と自然の博物館と仙台市科学館が共同で、被災した沿岸部にある仙台市六郷児童館・七郷児童館でワークショップを行いました。8月には、のちに代表となる清水文美さん（兵庫県立人と自然の博物館・連携活動グループrun♪run♪plaza）がプロジェクトを発案。11月には任意団体「こどもひかりプロジェクト」を立ち上げ、12月にはメンバーを募集、2022年まで活動することを目標に動き出しました。1995年の阪神淡路大震災のときにはミュージアムの力が及ばないと思っていましたが、そんなことはないと問い直し、信じて走り出したのです。

2012年

2012年早々に美術館学芸員らによる「びじゅつ部」が始動。やがて、子どもたちが全身を使ってみんなで一枚の絵を描く人気プログラム「大きな絵をかこう」を生み出すことになります。6月8日にはせんだいメディアテークを会場に

「こども☆ひかりフォーラム」を、翌9日には仙台市科学館で「こども☆ひかりフェスティバルinせんだい2012」を開催。

2013年

6月8日、まだ津波による被害で閉鎖されたままの仙台市農業園芸センター（現せんだい農業園芸センター）で「こども☆ひかりフェスティバルinせんだい2013」を開催。広い屋外の会場で50名を越える学生ボランティアが活躍し、これを機会に「ミュージアムネットワークでユースの社会力UP!プロジェクト」も始まります。単にボランティアではなく「ユース・スタッフ」と呼ぶようになったのもここから。

ユース・スタッフの企画により、12月22日・23日には、仙台駅前のビルAER（アエル）2階で、「こども☆ひかりミュージアムストリート——アエルで会える!全国のミュージアム——」が行われ、子どもたちの笑顔だけでなく、学生たちが成長する場にもなってきます。

2014年

ユース・スタッフが執筆・編集者となり、フリーペーパー「ミュージアムキッズ」を創刊（2回の準備号に続き、2019年まで10号、2021年には“ミニ”を発行）。

7月21日には、AERで「こども☆ひかりフェスティバル」を開催しました。ドレスコードは「青」。そして12月23日には、再びAERで「こども☆ひかりミュージアムストリート2014」も。

子どもたちにとって、科学と文学の間に仕切りはないし、歴史と美術もひと続き。ミュージアムは宝箱だし、びっくり箱でもある。楽しいミュージアムは楽しみながらつくるもの。大人が楽しんでいなくてどうして子どもたちを楽しませることができるだろうか。学芸員たちの本気が子どもたちの好奇心を刺激し、ミュージアムの底力を引き出す。こども☆ひかりと全国の仲間が教えてくれた。

2015年

6月14日に、仙台市縄文の森広場にて「こども☆ひかりフェスティバルinせんだい2014」を、12月19日には八木山動物公園で「こども☆ひかりミュージアムストリート2015 in八木山動物公園」を開催しました。12月は仙台市地下鉄東西線が開業したばかり。西端の駅がある八木山動物公園と東端の荒井、あいだの大町を結んだ企画「ぞうさんのめぐみでクッキング☆祝!地下鉄東西線開業」も行いました。

目の前で起こることに目を輝かせる子どもたちにとって、それが科学の実験かどうかなんて関係ない!面白いから吸い寄せられ、不思議だから知りたくなる。なぜだかわかればますます面白くなり、サイエンスの世界に興味を持ってくれる。そして、大学生のお兄さんやお姉さんがそばにいてくれるから、怖そうな顔をした先生でも安心して近づいてきてくれる。これって結構大事なこと。

2016年

6月25日・26日、全国から50を越えるミュージアムが仙台卸商センター・サンフェスタに集まり、「ミュージアムキッズ!全国フェアin仙台」を開催。伊達政宗の兜をかぶって登場した京都国立博物館PR大使の「トラりん」（尾形光琳の『竹虎図』から抜け出したキャラクター）

は、はじめて京都を離れてのお目見え。

年末の12月17日には「プチ・ミュージアムストリート2016」をせんだいメディアテークで。こちらはSMMA恒例の「ミュージアムユニバース」とのコラボレーションでした。

子どもたちにとってミュージアムは生きる力を育む場。美しいもの、不思議なもの、楽しいことに触れ、驚き、感じた体験がすべて成長の糧になる。そして、ミュージアムもまた、子どもたちの力を吸収して、進化し、成長する。ミュージアムの連携がミュージアムの可能性を広げてくれることを改めて実感した。

2017年

地域で育つ子どもたちのためにミュージアムがなすべきことをテーマに、仙台国際センターでの研修交流会を2月5日に実施。そして、6月17日には、前年大地震に見舞われた熊本で「ミュージアムキッズ!全国フェアin熊本」が開かれ、仙台からは地底の森ミュージアムと仙台市縄文の森広場が参加しました。東日本大震災以来の支援される側から、おたがいさまの関係へ。

2018年

ICOM（国際博物館会議）京都大会のプレイベントとして、9月14日に「ミュージアムキッズ!全国フェアin京都」を開催。仙台からは仙台市博物館、地底の森ミュージアム、そして、仙台市縄文の森広場が参加しました。地底の森ミュージアムおなじみの旧石器人も会場に出現。

2019年

再び研究交流会が地底の森ミュージアムで開かれたほか、11月9日・10日の「ミュージアムキッズ!全国フェアin淡路島」に、地底の森ミュージアムと仙台市縄文の森広場が参加しました。

……と、全国のミュージアム、ユース・スタッフ、そして地域の方々と駆け抜けてきましたが、2020年初頭に新型コロナウイルスが日本でも確認されてから2年近く、活動は自粛せざるを得ない状況に。

しかし、地域に生きる子どもたちと同じく地域に根ざすミュージアム、そこにかかわる大人たちが、それぞれに作用しながら生まれる力の確かさを、東日本大震災から10年を経た今、「こども☆ひかりプロジェクト」が示していることは間違いありません。